

訳読から音読への授業を目指して

小笠原 良浩

兵庫県立相生高等学校

1. はじめに

1 時間の授業の中で生徒がどれほど英語をしゃべっているかを考えると、非常に少ないことがわかった。英問英答などを取り入れたが、日本語による内容説明の部分を省略することができず、それに多くの時間を割いていた。生徒も教科書の英語を日本語で理解することで満足しており、音読に時間をかけつつも、リプロダクションできるようなレベルまでいかなかった。

そこで日本語訳を配布することによって内容説明の時間を省き、音読に時間をかけるようにした。音読を通して学習事項の定着がすすめば、リプロダクションまで到達できると考えた。また、シリコンオーディオを使用することにより、個々の生徒のレベルにあわせた音読練習ができるのではないかと考えた。

2. 課題の設定と研究計画、及び授業実践

(1) 1学期は、予習の確認として和訳の穴埋め問題を授業の最初に配布した。これはスラッシュリーディング用の練習としても使うハンドアウトである。ワークブックとこのハンドアウトを併用することによって和訳にかける時間を省いている。授業の最初は前時の復習として Last Sentence Dictation をおこなった。授業の中心は Read & LookUp で、ペアプラクティスで活動させている。また、できるだけ速く音読させる速音読練習や、一斉シャドーイングの活動も取り入れた。

授業の詳細は以下の URL 参照。

授業案および反省

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~h16Eng/admin/journal01/ogasahara.pdf>

テキスト英文

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~h16Eng/admin/journal01/ogasahara-text.pdf>

授業で使用したテキスト音声

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~h16Eng/admin/journal01/journal01.htm>

授業で使用したハンドアウト（和訳の穴埋め問題）

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~h16Eng/admin/journal01/ogasahara-japanese.pdf>

教科書準拠のワークブック（2 ページ分）

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~h16Eng/admin/journal01/ogasahara-1.gif>

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~h16Eng/admin/journal01/ogasahara-2.gif>

授業の様子（ビデオ 3 種類）

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~h16Eng/admin/journal01/journal01.htm>

（２）２学期は、１学期の音読練習をさらにバージョンアップしようと、パワーポイントを使用した Read & LookUp を取り入れた。イメージとしては、フラッシュカードの英文版と言ったところである。授業案の反省に記しているが、パソコン・プロジェクター・スクリーンのセッティングに時間がかかる。授業前の休み時間 10 分でも足りないくらいである。また、後ろの生徒に取っては見にくいようであった。光度などハード面での改善すべき点もある。普通教室での使用はなかなか難しいと思った。結果的にはこれらの機器を使った授業は、残念ながら今回 1 回のみであった。

リーディングに関して、前回のスラッシュリーディング用ハンドアウトのフォーマットを変更した。日本語・英語ともにセンスグループで改行し、生徒の意識をそちらに向けさせた。Read & LookUp の練習も前回よりしやすくなったはずである。ハンドアウトの作成にはエクセルを使用した。

授業の詳細は以下の URL 参照。

授業案および反省

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~h16Eng/admin/journal01/ogasahara-No.2.pdf>

授業で使ったハンドアウト

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~h16Eng/admin/journal01/ogasahara-Lesson6part3.pdf>

授業で使ったパワーポイントのファイル

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~h16Eng/admin/journal01/ogasahara-pp2.ppt>

（３）２学期 10 月に入り、個別音源（シリコンオーディオ）を利用した授業を計画することとなった。個別音源を使用する最大のメリットはイヤホンから聞こえてくる英語に集中できるところにある。また、２種類のスピードを用意してあるので、個々の生徒のレベルにあわせた学習が可能である。それについては大きな成果が上げられたと思う。

音読について、１学期にくらべるとかなり大きな声が出るようになった。また、授業の大半がペア活動なので、受動的な態度で授業に参加する生徒が少なくなった。

授業の最後の部分でテキスト内容のディクテーションを取り入れた。これは「書く」という作業によって、英文をより記憶に残りやすいようにするためである。結果的には時間切れになってしまったが、なんとか 5 分程度は確保したいと思っている。

授業中に使用したハンドアウトであるが、前回は左側が英語、右側が日本語であったが、反対にして、左側を日本語、右側を英語に変更した。これは、生徒に日本語を見て英語に直すという意識付けをさせようとしたのがねらいである。

個別音源の使用について、今回は英語一文を 1 つのトラックとしてデータを作成したので、テキストの 1 パートを終わって、最初から聞き直そうとするとき、何度もダイヤルを回さなくては

ならないのが、生徒の間では不評であった。

授業の詳細は以下の URL 参照。

授業案および反省

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~h16Eng/admin/journal01/ogasahara3.pdf>

テキスト本文と訳例

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~h16Eng/admin/journal01/ogasahara-3.pdf>

授業で使用したハンドアウト

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~h16Eng/admin/journal01/ogasahara3phrase.pdf>

(4) 2 学期 1 1 月に公開授業をおこなった。複数の先生方に授業を見て頂くと同時に、2 台のビデオカメラを使用して授業の様子を記録した。授業の流れは、以下の通りである。

- 1) 教科書本文の内容確認 (ワークブック使用)
- 2) 本文の黙読と音読チェック
- 3) 教師のあとについてコーラスリーディング
- 4) ペアになりシリコンオーディオを利用してシャドーイング (*ビデオクリップ参照)
- 5) 生徒どうしてシャドーイング (*ビデオクリップ参照)
- 6) 日本語を見て英語でリピート (*ビデオクリップ参照)
- 7) ディクテーション (*ビデオクリップ参照)

ビデオクリップについては、英語授業研究サークルのHP参照

授業スタイルは個別音源を取り入れた頃の授業とほぼ変わらないが、シャドーイングの時間が約 20 分間と若干増えている。また、ハンドアウトの右端にチェック欄を設けることにより、ペアで学習する際、両方の生徒に責任を持たせた。つまり、一人がシャドーイングしているときに、そのパートナーは相手がきちんとシャドーイングできているかどうか、そのチェックをするのである。

授業の最後にディクテーションをしたが、前回同様時間切れである。授業の前半部分でどこかカットできる部分がないか、あるいは活動を短くできる部分がないか、もう一度見直してみる必要がある。

授業の詳細は以下の URL 参照。

授業案および反省

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~h16Eng/admin/journal01/ogasahara-LessonPlan.pdf>

テキスト本文と訳例

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~h16Eng/admin/journal01/ogasahara-Lesson8part1text.pdf>

授業で使用したハンドアウト

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~h16Eng/admin/journal01/ogasahara-Lesson8part1.pdf>

3. 授業の振り返りと考察

＊ 別紙パイチャートプレゼン参照

4. まとめと今後の課題

今回のアクションリサーチによって、自分の授業スタイルが訳読から音読に大きく変わった。以前から思っていたことは、「授業中にできるだけ生徒に英語を話す時間を与えてやりたい」ということであった。以前の授業では、英語による Q and A を取り入れていたが、時間がかかる割に生徒全体を授業に巻き込むというような活動ではなかった。

今回のアクションリサーチで「訳先渡し」と呼ばれている授業方法を取り入れた。ワークブックを使用して予習させてはいるものの、やはり教科書の和訳を配るというのは最初抵抗があった。しかしやってみると、別に問題はなかったようである。むしろもっと早くから取り入れていればよかったとさえ思うようになった。内容確認の時間を省くことによって音読にあてる時間が増え、生徒の頭の中に「日本語」ではなく、「英語」を残すことができるようになりつつある。

また、今回は個別音源（シリコンオーディオ）の使用と、ペアーワークを取り入れることによって、生徒がより積極的に授業に参加するようになった。テキストのリスニング教材として「ナチュラル読み」と「フレーズ読み」の2種類のスピードで英語を聞くことができたのは、まさに I C T のおかげである。今後このようなスタイルで授業ができるよう個別音源の普及が望まれる。現在は次のような授業スタイルを取っている。

- 1) ワークブック答合わせ（5分）
- 2) ボーカルリーディング練習（10分）
- 3) シャドーイングと Read & LookUp 練習（20分）
- 4) リプロダクション（10分）
- 5) プレゼン（5分）

リプロダクションとはテキストやハンドアウトを一切見ないで、テキストの内容を生徒がそれぞれノートに要約する作業である。ヒントが全くないとかかなり難しいので、テキストの内容に関する質問を英語で板書しておく。それらの質問に答えていけば、自然とサマリーになる。生徒は自分で英文をノートに書いていく。テキスト通りの英文でもよいし、内容があればオリジナルの英文でもかまわない。時間を見計らって全員で確認する。

最後に何名かの生徒を前に出させて、何も見ずにテキストの内容についてプレゼンをさせる。黒板に質問が書いてあるから、それらに答えていくだけであるが、なかなか難しい。今までクラス全体を前にプレゼンさせたことがないから、生徒もあまり慣れていない。

今後の課題であるが、授業の最後の15分間の使い方である。インプットを十分させた上で、今度は効果的にアウトプットができるようにさせるには、どうすればいいか。この点にフォーカスしてリサーチを継続したい。